

土岐善麿

武川忠一 著

短歌シリーズ・人と作品 11

武川忠一（むかわ・ちゅういち）

大正8年10月10日、諏訪市に生まれる。早稲田大学文学部卒業。早稲田大学教授。歌人。歌誌「まひる野」創刊に参加し、現在編集人。著書に歌集『氷湖』『窓冷』『青釉』などがあり、『現代短歌鑑賞辞典』（東京堂）、『窪田空穂集』『日本近代文学大系17』（角川書店）、『現代短歌を学ぶ』（共編、有斐閣）などのほか、近代短歌に関する諸論文がある。

短歌シリーズ 11
人と作品

土岐善磨

昭和五十五年九月二十五日 初版印刷
昭和五十五年十月五日 初版発行

定価 一八〇〇円

著者 武川 忠一

発行者 及川 篤二

印刷所 共信社印刷所

発行所 株式会社 桜楓社

東京都千代田区猿樂町二一八—十三

電話 二九五—八七二（代）
振替 東京六一八〇二〇

序

土岐善麿が生涯の間に目を通した書物はどれほどであつたろうか。気の遠くなるような量だつたと思われる。ヨーロッパ、中国、日本の古典から現代にわたつて、それは本書巻末の幅広い著作目録を見ても、その一端はわかる。創作活動は短歌だけでなく、新作能の詞章から長唄の歌曲類、ラジオドラマの脚本、漢詩和訳に及んでいる。研究は田安宗武、京極為兼から杜甫とその周辺、さらにローマ字、エスペラント運動から国語国字問題に関する発言、龐大な量の、古典から現代に及ぶ歌論など、到底ひとりの果した仕事とは思えないような活動であつた。善麿が歌人と呼ばれるのを必ずしも好まなかつたのは、もっともだと思われる。歌人としての生涯も、その短歌も、右のような多方面にわたる仕事を果してきた土岐善麿のすべてが反映しているのはいうまでもない。

歌人としての面に限つて述べた本書でも、多少は他の分野との関係をも考えざるを得なかつたが、方針としては、はじめから、むしろ歌人から溢れる部分には禁欲的にならざるを得なかつた。

一度は、歌人土岐善麿の足どりを追つて見ようと思ひ立て、初期の歌集などを集めはじめ

たのは、昭和三十年ごろからだった。二、三の小論で志を述べる作などと考えたりした。いまは、善暦の愛したことばの一つ、歴史の中の生活者ということばの意味の厚さを思っている。今年四月十五日、土岐善暦は永眠した。九十五歳の誕生日を迎えようとする、二ヶ月前である。小著はしばらく先を進める気がしなくなった。いま、一本を霊前に捧げる。

なお善暦研究は冷水茂太氏などによって最近ようやく進展しつつある。本書も年譜など氏の調査に負うところが多かった。また参考文献年譜には小口信治氏の助力を得た。最後に桜楓社の方々、とくに本書を担当された丸山かずみさんの熱意に感謝する。

昭和五十五年九月二十日

武 川 忠 一

作家研究編

目

次

序

作家研究編

- 一 作歌以前―善磨の人間形成……………九
 生誕と環境…九 父善静…二 幼少年期…二 歌との出会い…二四
 温故知新…二五 中学生生活…二七
- 二 作歌への出発―「白菊会」のころ……………一九
 「新声」歌壇―薫園を知る…一九 白菊会への参加…三 「白菊会」
 の歌風と湖友…二四
- 三 一つの開眼―明治四十年ごろまで……………二六
 早大学生時代…二六 空穂の『まひる野』…二七 牧水との交遊…二九
- 四 生活派への歩み……………三二
 『NAKIWARAI』と『はつ恋』…三三 ローマ字三行書き…三四
 啄木の批評…三六 明治四十三年という年…三六 啄木との交流―
 「樹木と果実」…三九 手の白き労働者こそ…三九 三行書きについて

て……四 『黄昏に』の世界……五 啄木の死……四

五 「生活と芸術」の時代……………六

『不平なく』の歌……六 『竹みて』……五 「生活と芸術」をめぐ
つて……五 「籐椅子の上にて」……五 『街上不平』と「心遊ばず」
……五 「生活と芸術」の廃刊……五

六 「生活と芸術」以後……………七

『雑音の中』……七 『緑の地平』……五 結社批判など……七

七 「日光」への参加……………七

「日光」への参加……五 「日光」時代の歌……七 「日光」時代
の歌……五 『初夏作品』……六 実感直叙……六 「実感」のひろがり
……六 「日光」時代の意味……五 口語歌との関係……六

八 口語自由律のころ……………七

自由律への萌芽……六 昭和初頭の歌壇……六 『新歌集、作品1』
……六 短歌に寄せる……五 「現代の短歌」など……五 長唄・ラジ
オドラマ・「国家八論」……七

九 思想の抒情化……………九

暗い時代へ……丸 『作品2』……二〇〇 歌が新しくなり得るか……二〇三
リズムをめぐる……二〇四 憂鬱なる時代……二〇六 『六月』……二〇九
大日本歌人協会……二〇九 抽象化をめぐる……二二 『田安宗武』と
新作能……二三 『周辺』……二四

十 戦後十年……………二一六

三俣村へ……二一六 敗戦……二一七 『秋晴』『夏草』『冬風』『春野』……二一八
『冬風』『春野』……二二三 定型の韻律美……二三四 『鶯の卵』と新作能
……二三五 述志の歌の定着……二三六 抽象化・捨象化……二三六 時代の転
換……二三

十一 歴史の中の生活者……………二二三

杜甫と為兼……二三 歴史の中の生活者たち……二三四 叙事と抒情の可
能性……二三 『歴史の中の生活者』『相聞抄』『額田抄』……二三四 日
常詠など……二三四

十二 清 忙……………二四五

五冊の歌集……二四五 『四月抄』の二篇……二四六 時序百年……二四七

十三 伝統と現代……………二五〇

秀歌鑑賞編

見まもればさゆらぐ百合の (二五)

Ishidatami, koborete

utsuru (二五)

Musashino wa Kataoka-

tsuzuki (二五)

Kimi uo Onou, — Roschi

no (二五)

Waga gotoki yonotsunobito

wa (二五)

指をもて遠く迎れば

(二六)

働くために生けるにやあらむ

(二六)

子をつれて、日ごとに遊ぶ

(二六)

日本に住み、日本の国の

(二六)

手の白き労働者こそ

(二六)

焼趾の煉瓦のうへに、

(二六)

瀟洒たる檀子と椅子が

(二六)

長ぼそき食パンを、

(二六)

りんてん機、今こそ響け。 (二六)

労働をよろこぶ心を、 (二六)

つと、崖より、

(二六)

さかしまにおつる

(二六)

函館の青柳町に

(二六)

さらさら、さらさら、——

(二六)

ひとりげいの

(二六)

すちいむに、靴をのせつつ、 (二七)

葎と、垢と、たばこ、酒との (二七)

かんらん、かんらん、 (二七)

一兵卒として

(二七)

われも、そのとき、

(二七)

さまさまの、はじめての人に (二七)

あまりに貧し、あまりに貧しき

(二七)

海のひかりがはつきりと

(二七)

むつつりとかれは働く

(二七)

なれの父のこの臆病に

(二七)

鞠投げて独逸の浮虜は (一八二)
砂はら砂はら、あを葉きらめく

とかくして不平なくなる (一八三)
せめてわが自由になるものを (一八四)

なきがらはさびしきものか (一八五)
いつぼんの枕にしるせる (一八六)

朝なり、われらは帰る (一八七)
道のうへに石はひろひつ (一八八)

この大地にわれは立てりと (一九〇)
危ふしいまは逃れねと (一九一)

温室の前にかきおろす (一九二)
朝風にひとすち遠く (一九三)

ゆくところまで行かむともだえ (一九四)
春浅き雪げの雲に (一九五)

はつ蟬のこゑとぞきけば (一九六)
ただひとつわれにさへなほ (一九七)

はじめより憂鬱なる時代に (二〇〇)
夜空遠く爆音ゆくなり (二〇一)
われを指さすおほきなる手を (二〇二)
わが家を宿舎としつる (二〇三)
みづからは時を得たりと (二〇四)
いづこに安き天地を求め (二〇五)
遺棄死体数百といひ (二〇六)
柳蘭かしここに (二〇七)
蚊帳のそとに虫の羽ばたく (二〇八)
おん身だけにこれや等しく (二〇九)
郭公よけふこそわれは (二一〇)
ここにありてわが立ち嘆く (二一一)
ふるき日本の自壊自滅し (二一二)
こがらしのあかつき近く (二一三)
あなたは勝つものとおもつて (二一四)
しらじらと桜の花の (二一五)
われも世に生きゆくすべは (二一六)
新たなるときを待ちえて (二一七)
わが歌を愧ぢずおそれず (二一八)

かひなくもわれも然りき (三九)
 時計台の時計の針は (三〇)
 新たなる自由は得つれ (三一)
 背ひく獨樂足高獨樂の (三二)
 六十三歳ふたび配所に (三三)
 かもめよ鷗よいく夜眠らず (三四)
 春の夜のもしび消して (三五)
 櫻ちれば五月となりやがて (三六)
 会場を出でてたちまち (三七)
 たたなづく青垣やまに (三八)
 研ぎすます一挺の鑿 (三九)
 心の欲するところに (四〇)
 相共に呼べばこたえて (四一)
 花柳更に私なしや (四二)
 何かを非難するには (四三)
 ああ流謫の身を (四四)
 時すぎて霜にさき薫る (四五)
 清忙のかくて老いゆく (四六)
 鑑真像みあかし淡く (四七)
 旅びとよと 呼びかけて出づる (四八)

老いてなおにじむ涙の (三九)
 石も竹もなぎとて (四〇)
 この梅よ ともに老いきて (四一)
 式はてて 夕冷えまざる (四二)
 時序百年の心に悔いず (四三)
 つねにむなしく叫び (四四)
 祈りしには (四五)
 ひょうびょうとして (四六)
 月面を踏みし (四七)
 冷房の書齋にひそむ (四八)
 木簡に竹簡にかきし (四九)
 われやいまそこにしあらば (五〇)
 新しい世界の前に (五一)
 学問はわれに流離の (五二)
 いのちありて 三たび北京の (五三)
 春のひかり千里を照らす (五四)
 のこぎりのあと (五五)
 中陰のひと日ひと日 (五六)

作品選	三三
-----	----

著作・参考文献	三六
---------	----

土岐善曆略年譜	六五
---------	----

短歌索引	三九
------	----

装画 佐藤多持

一 作歌以前——善曆の人間形成

生誕と環境

明治十八年（一八八五）という年は、鹿鳴館で仮装舞踏会が開かれ、不平等条約改正のために、欧化政策が風靡する。文壇では、尾崎紅葉らが硯友社を結ぶ。一方坪内逍遙の『小説神髓』がでて、小説の改良が論じられ、新しい気運は、ようやく文壇にも及んでいく年であった。この年、明治十八年六月八日、土岐善曆は、浅草松清町の等光寺住職土岐善静の次男として生まれた。母は觀世、兄に静、姉安養があり、妹和貴がやがて生まれる。等光寺は、浅草東本願寺の境内ともいえるような寺町にあり、真宗大谷派の寺で、父善静は、学僧でもあり、柳營連歌の最後の宗匠であった。この父をめぐる環境は、善曆の人間形成には大きかった。まず等光寺について触れる。

等光寺は義濃国を領した土岐頼芸が、斎藤道三の逆謀によって国を奪われたのち、子のひとり頼太良が三河国広石村の生母の家を寺としたのがはじまりである。いまでも山号を広石山という。家康が江戸幕府を開くとともに、慶長十四年、武蔵国豊嶋郡湯嶋南下花田村に移転し、明

暦四年にいまの地に転住したという。善静はその十三代目住職であった。父の記録をもとに善暦は、このことを、さらに詳細に調べているが、等光寺と土岐氏の大略はほぼ右のようなものである。

善暦の子供のころは、等光寺のあった東本願寺一帯は、「二十一の末寺が、濠^{ほり}をめぐらした一廓の中に、いらかを列ねていた」〔等光寺縁起〕。善暦は本願寺地内の様子を次のように書いている。

表門から東門へ出る道が「七曲り」といわれ、等光寺の通りは前に南北のほそい道がつづいていた。表門から中門にいたるところが広^{ひろ}場で、消防のポンプなどおかれ、寺や墓地のあいだには講部屋もあり、所化僧の家もあり、花売りの店などもあって、だ菓子も並んでいた。本願寺の本堂からは東へ食堂、奥へ書院などがつづき、本堂と食堂とのあいだには、ひろい廊下が斜めについていたので、ぼくなどは、その廊下をころがって遊んだりしたものである。

浅草とはいっても、この寺町は閑静な一角で、善暦にはふるさとであった。

冬の雨、／わが育ちたる浅草の寺にかへりて、／眠らむとおもふ
〔黄昏に〕

関東大震災以後は商家が間に軒を並べて、全く当時の面影はない。いま等光寺には、後に善暦の厚意によって、一時遺骨を収めた啄木にちなんでその碑がある。

父善静

父善静については善曆自身もしばしば述べているが、明治三十九年六月、病没の際、仏教雑誌「法話」(十八ノ六)に小伝がある。それによれば、五歳にして浄土三部経を誦し、七歳で得度して等光寺をつぎ、十一歳の折、書を能くするゆえをもって、「先帝の御前に揮毫せしめらる」とある。悉曇性相の学、柳営連歌、和歌・俳句、插花、点茶、聞香に通じて、「常に斯道の指導者」として重視されたことが述べられている。事実、生前の明治三十六年、「仏教文芸」臨時増刊の「仏教文芸十二傑」には、俳句によってその一人にあげられている。学僧としては、「仏教文芸十二傑」のあげるところによれば、その著、『三国仏教伝通略史』、『仏教講談蒐録』、『源語大意』、『連歌筑波の枝折』など九つの名をあげている。この中には一冊にまとめずに終ったものもあるが、学僧としては勿論、文字どおり多才多芸の人物であったことは、次のような「仏教文芸十二傑」のいうところでも明らかである。

俳句和歌を能くする土岐善静氏を知る者多けれど、未だ書を能くする土岐善静氏あるを知る者少し。俳句を能くし和歌を能くする土岐氏あるを知る者多けれど、未だ漢詩を能くし布教を能くし、茶の湯を能くし挿花を能くし雅楽を能くすると云ふが如き、七通八達の手腕を有する土岐氏あるを知る者は殆んど少し。〔俳匠土岐善静氏〕、「仏教文芸」臨時増刊、明

36・9)

駭くべき多才多芸といわねばならない。善静は、插花(池坊新派)、聞香(志濃流)、点茶